

原文

宇治拾遺物語「一条棧敷屋の鬼の事」

今は昔、一条の棧敷屋さじきやにある男とまりて傾城けいせいと臥ふしたりけるに、夜中ばかりに風吹き雨降りてすさまじかりけるに、大路おほちに「諸行無常」と詠じて過ぐる者あり。何物ならんと思ひて蒨しとみを少し押し開けて見ければ、長は軒たけと等ひとしくて馬の頭なる鬼なりけり。おそろしさに蒨をかけて奥の方へ入りたれば、この鬼格子かうし押し開けて顔をさし入れて、「能く御覽よじつるな、御覽じつるな」と申しければ、太刀を抜きて、入らば斬きらんと構へて女をばそばに置いて待ちけるに、「能く能く御覽ぜよ」と云ひて去にけり。百鬼夜行にてある遣やらんと恐ろしかりけり。それより一条の棧敷屋にはまたも宿らざりけるとなん。

※傾城…遊女。 ※長…身の丈。身長。

※蒨・格子…当時の建物に取り付けられた建具。格子の裏に板を張った

戸が蒨で、日光や雨風を防いだ。

口語訳

宇治拾遺物語「一条棧敷屋の鬼の事」

今は昔、一条の棧敷屋にある男が泊って遊女と一緒に寝ていると、夜中ごろに風が吹いて雨も降って激しくなってきたころ、大路に「諸行無常」と唱えながら通り過ぎる者がいる。(男は)『何者だろうか』と思つて蒨を少し押し開けて外を見ると、身の丈は建物の軒先と同じくらいで馬の頭をした鬼がいた。(男は)恐ろしさのあまり蒨を閉じて奥の方へ入ったところ、この鬼は格子戸を押し開けて顔を差し入れて、「よくもご覧になったな、ご覧になったな」と申し上げたので、(男は)太刀を抜いて、『(鬼が)入ってきたら斬ってやる』と身構えて女を傍らに引き寄せて待ち構えていたところ、(鬼は)「しつかりご覧なさい」と言つて立ち去ってしまった。(男は)『(鬼は)百鬼夜行だったのだらう』と恐ろしくなった。それ以降(男は)一条の棧敷屋には二度と泊らなかつたという。